

新 響

新交響楽協会第2回合同演奏会

1969.7.27 (日) 2:00 p.m.

東京文化会館大ホール

皆様、本日はご多忙中の処をようこそおいで下さいました。心から御礼申し上げます。

新交響楽協会は昭和41年3月15日創立されたアマチュアの音楽グループであり、新交響楽団、新日本交響楽団、新交響吹奏楽団の3つの団体によって組織されております。創立当初わずか100名足らずの団員でしたが、現在では200名を越すまでに成長いたしました。創立年度の8月1日に第1回合同演奏会を開催して以来、この3年間3つの団、各々が、その特色を生かしつつ幅広い音楽活動を続けてまいりました。新交響楽団のソビエト演奏旅行をはじめとして、意欲的な企画で好評を得たベートーヴェン・チクルスや、定期演奏会、学校、会社、民主団体への出演等がそれであります。

私達の音楽に取組める時間は、忙しい勤務や学業の合間に限られるため、プロのそれに比較して、はるかに少なく、技術的に劣るという問題は、残念ながらどうしてもつきまといがちですが、しかし、それを是認するのではなく、常に全力をつくして、その壁に立ち向っております。

「アマチュアだから」というかくれみのを利用して、下手であることを弁解するのではなく「アマチュアだから」こそプロには望み得ない可能性があると信じています。たとえば地方の小都市や、小・中学校の文化祭、会社等への出演は、私達アマチュアなればこそ、実現可能な活動であり、日本の音楽文化の礎としての、これら一連の活動こそ、私達新交響楽協会に与えられた義務であり、存在理由であると考えております。

この度、ここに第2回合同演奏会を開催することが出来ますのは、ひとえにご来場の皆様方、日頃からの並ならぬご支援の賜と感謝致しますとともに、3年間の成果を、是非皆様にお聴きいただきたく、全団員心をこめて演奏いたすつもりであります。最後に今後共、旧に倍して、ご指導、ご鞭撻下さいます様お願いして、ごあいさつといたします。

1969年7月27日 新交響楽協会

指揮者紹介

●村 方 千 之（新交響吹奏楽団常任指揮者）



我が楽団の常任指揮者になって、はや4年。全国をとびまわりながら、未熟な我々の指揮にあられた先生は初めから知る人ぞ知るきびしさの鬼。

でも、連休中、車に分乗して行った強化合宿の帰り道。道は混雑し、その上三日の間、昼は先生にしぼられ、夜は古参団員に“しぼられ”た運転手君。つかれきって一路東京への道すがら大事な楽器をいっぱい、目を閉じながらのいねわり運転。このとき先生は彼をいたわり、とっておきの話をして下さるほどのやさしさとユーモアをかねそなえている。

●芥 川 也 寸 志（新交響楽団常任指揮者）



1925年 東京生れ。

1947年 東京音楽学校研究科作曲部を卒業。ピアノを井口基成、指揮を金子登、作曲を橋本国彦、下総統一、伊福部昭に師事。

作曲のかたわら新交響楽団の常任指揮者として14年近くにわたり、このアマチュアオーケストラの育成に努力してきた。

主要な作品としては、＜交響3章＞＜交響管弦楽のための音楽＞＜弦楽のための3楽章＞＜エローラ交響曲＞＜オペラ・暗い鏡＞＜オスティナート・シンフォニカ＞などがある。

●岡 田 和 夫（新日本交響楽団常任指揮者）



大きな目、高い鼻、端正な横顔、にも拘わらず、近よりにくい感じが全然ない。なかなかのおしゃれであるが、丁度、ブラームスの交響曲の出だしが、いつもなにげなく始まるように。指揮台の先生は決してどならない。どなる事が団員の緊張を持続させる最良の方法ではない、というのが先生の信念であるのかもしれない。しかし団員は先生を信頼している。過去の演奏会を全て暗符で棒を振られたそのファイトに対しても、頭がさがる。先生はその貴重な時間を他に振り向ければはるかに効果の上る仕事が出来、社会の期待に応える事が出来るのに新日響にさい下さる。音楽家仲間によく問われると云う「アマチュアのオーケストラにそんな時間をかけて何が得られるのか」と。先生自身ははっきり云われた事はなく、私達にもその意味は漠然としている。しかし、いつか先生と団員の心が一体となった時、霧のかなたにあるなにもものに、ふれる事が出来ると思う。

プログラム

指揮＝村方千之

吹奏楽＝新交響吹奏楽団

歌劇「タンホイザー」より 大行進曲……………R・ワグナー

バンドのための三つの前奏曲……………清水 脩

祝典行進曲……………団 伊玖磨

指揮＝芥川也寸志

管弦楽＝新交響楽団

喜歌劇「こうもり」序曲……………J・シュトラウス

組曲「ミシシッピー」……………F・グロフェ

I フェーザー・オブ・ウォーターズ

II ハックルベリー・フィン

III オールド・クレオール・ディズ

IV マルディ・グラス

指揮＝岡田和夫

管弦楽＝新日本交響楽団

交響曲 第5番「新世界」より……………A・ドボルザーク

I アレグロ

II ラルゴ

III スケルツォ・モルトヴィヴァーチェ

IV アレグロ・コン・フォーコ

● 曲 目 解 説

● 歌劇「タンホイザー」より 大行進曲 R・ワグナー

トランペットの高らかなファンファーレで始まるこの曲は、ワグナーが、12～13世紀の史実と伝記とによって考案した物語である歌劇「タンホイザー」の第2幕第4場に使われている最も有名な入場行進曲です。

● バンドのための三つの前奏曲 清水 脩

曲名のプレリュードというのは、近代では極く自由な形式的、和声的内容を持った独立した小品のことを言いますが、この曲の場合も、その様な意味でごく気まぐれな即興のおもむきを持った、それぞれ独立した特長のある内容の小曲を三つ、うまくコントラストとして一つの曲集の様にまとめたものです。

(カワイ楽譜版)

第1曲 10小節の短くダイナミックな序奏部を経て2分の2のモデラートの主部に入ります。主部は3—3—2変拍子的なエネルギーが、そして明確なリズムの伴奏の上を2拍子の東洋風なメロディーがのびやかにしかも次々とモダンな和声的变化を伴って展開されて行きます。

第2曲 4分の4拍子、レント。ト短調を基調にして書かれ、打楽器と、低音楽器の繰り返すオスティナート風な伴奏の上を日本的イメージの強いメロディーがのびやかに、しかもダイナミックに奏でられて行きます。

第4曲 この曲は、 $\frac{2}{2}$ $\frac{5}{8}$ $\frac{3}{8}$ $\frac{7}{8}$ などが連続した変拍子のアレグレット・スケルツァンドで、活々とした、よりモダンな諧謔的内容を持った曲で、中間部には、木管や金管のソロで、素朴な情緒をもった部分も出てきます。

● 祝典行進曲 団 伊玖磨

この曲は昭和34年4月10日の皇太子殿下と美智子妃殿下との御成婚を記念して作曲されたもので、国立競技場で7万人の聴衆を集めて初演された。

● 喜歌劇「こうもり」序曲 J・シュトラウス

「こうもり」は全3幕からなるオペレッタで、1874年ウィーンにおいて初演された。話の内容は、他愛もないものだが、あらすじは次のとおりである。

オーストリアのある小さな町に住んでいる金持のアイゼンシュタイン男爵が友人が友人の公証人ファルケ博士と仮装舞踏会にゆく。ファルケ博士は黒装束に黒い翼をつけた蝙蝠の扮装で大いにかっさいされる。その帰り、すっかり酔っぱらい、馬車の中で寝込んでしまったファルケ博士を、アイゼンシュタインは町の広場へそと置きざりにした。

翌朝、目をさましたファルケ博士は蝙蝠の姿でいる自分に気がつく。町の人々は「こうもり博士」と笑いものにす。くやしくてたまらないファルケは、なんとか仇をとろうと企てる。

この呑気な仇討が「こうもり」の中できりひろげられる。

序曲は、劇中の印象的なメロディーをつなぎ合わせたものである。

● 組曲「ミシシッピー」 F・グロフェ

グロフェは「グランド・キャニオン」で有名である。この「ミシシッピー」組曲は、彼の大作の最初の曲で、1925年、カーネギーホールにおいて、ポールホワイトマン楽団によって初演された。

ミシシッピー河は、アメリカ大陸を南北に流れる大河。上流はインディアンの居住地域、河口はジャズの発祥地ニューオーリンズである。この曲はミシシッピー河の流れにそった情景を描く四つの音画からなった組曲である。グロフェのアメリカニズムが、いかに名所に出てくる。

- I **ファザー・オブ・ウォーターズ**……父なる河「ミシシッピー」は流れる。
ゆったりと、そして、ときには激しく岩をかみ、また、ゆったりと大陸を横切って海へ流れこむ。
- II **ハックルベリー・フィン**……ミシシッピー河の沿岸地方に住む人たちの人情や生活をユーモラスな筆致で描いた文豪、マーク・トウェーンの小説でおなじみのいたずら小僧の姿に、この地方人気質をもりこんだもの。
主題はチューバに現われ、あとで弦楽に現われる。
- III **オールド・クレオール・ティズ**……やわらかい弦楽器のコードに乗って、イングリッシュホルンが古いクレオールの歌をうたう。
クレオールとは、ミシシッピーの下流、ルイジアナ州に移住したフランス人の子孫のこと。独自の文化を持っている。
- IV **マルティ・グラ**……終曲で、ニューオルリーズの名物、大謝肉祭を生き生きと描き出したもの。
この地方は、フランス系文化を受け継いでおり、古い伝統がある。そうしたエレガンスと、南欧的な華やかさの色どりが、曲のなかで巧みに融合させられている。

●交響曲 第5番 木短調 作品95

「新世界」より

ドボルザーク

アントニオ・ドボルザーク(1841～1904)はいわゆる、国民楽派に属する作曲家で、その代表的な作品には、ある一貫した民族的特性の個性的表現がある。ドボルザークはニューヨークの国民音学院長の地位を引き受け、1892年の秋、アメリカに來任し、3年間を風俗習慣を全く異にしているアメリカ人の中で生活した。この間学生を教え、演奏会を指揮し、作曲に励み、アメリカ土着民の風俗生活を研究したのであるが、物質的には余生を安全に送る保証を得ると同時に、視野をひろげ広い見地からの創作態度をとるようになったのである。彼が1895年アメリカに別れを告げた時、彼は、アメリカが彼に与えた好意と友情とに対する心からの贈り物を残した。それがこの交響曲「新世界より」である。

4楽章より成る各楽章はそれぞれ序奏をもって開始される。

〔第1楽章〕 序奏のアダージョはホ短調。8分の4拍子。楽章主部はアレグロでソナタ形式。

序奏はこれと有機的に結合し、全曲を一貫する精神的なものを用意する重要な任務を与えられている。

〔第2楽章〕 ラルゴ。変ニ長調。4分の4拍子。ロンド形式。主要主題はユール・アングレによって提示される。甘美極らない旋律である。

〔第3楽章〕 スケルツォ・モルトヴィヴァーチェ。トリオ形式。生気澀刺とした音楽で、インディアンが歌いながら元氣よく踊っている姿を、又同時に、ボヘミアの素朴な農民の歓喜にあふれた歌舞をも連想させる。

〔第4楽章〕 アレグロ・コン・フォーコ。ホ短調。ソナタ形式。

9小節の序奏の後に全管弦楽がフォルテッシモで奏する和音のうってホルンとトランペットが第一主題を提示して始まり、進んで3連音符のジグ風の旋律が現われる。

第2主題は弦のトレモロを背景としてクラリネットによって提示される。既に演奏された各楽章の特徴をなしている主題が次々に姿を現わし、楽想的な豊かな模様を織りながら展開され、コーダの中で力強い頂点を築いて終結する。(森 雄一)

新交響楽団・新日本交響楽団・新交響吹奏楽団団員募集

入団希望者は下記の練習会場又は事務所まで連絡下さい。

新 響 練 習 週一回 土曜日 5.30～9.00
東京文化会館リハーサル室

新 日 響 練 習 週一回 日曜日 5.30～9.00
東京文化会館リハーサル室

吹奏楽団 練 習 週一回 水曜日 5.30～9.00
東京文化会館リハーサル室

新交響楽協会事務所

連 絡 先 千代田区神田駿河台3-6 全電通会館6F
日音協気付 PHONE 253-9831

☐演奏会用プログラム

☐ポスター・カタログ

☐印刷原稿制作

☐レイアウト

有限会社 塩 野 印 刷

東京都葛飾区立石6-10-4 電話 693-5321